

# くりかえし

## 津守房江

日が昇り日が沈み、朝になり夕べになる。このくりかえしは宇宙の壮大なリズムであります。その中で人はその生活も心の世界も、このくりかえしに照応する動きを持つていると思われれます。先頃そんな考えを抱いて、多くの子どもたちの母親による生活記録を読みました。特に私に興味深かったのは、昼から夜へ移っていくその移り変りの時、昼と夜との間の子どもたちでありました。私自身の子どもたちとの朝夕の体験が、同じように多くのおかあさんの心にも写っていることが分り、「ああ、ここにも」という思いを幾たびか持ちました。またそれと同時にエリーナー・ファージョンの作品の中の子どもたちが、これらの実在の子どもたちと重なって浮んできました。

「人形といっしょにお茶のみました。そのうちそろそろ、夕方になり帰る時間になりました。……家まで帰る途中で、みどり色のトカゲが日にあたるうとして、石がきのすきまから走り出てくるのにあいました。というのは、月はあがったのに、お日さまもまだ出ている、みどり色のイタリアのトカゲは日なたほっこがすきだったからです。トカゲは宝石のようにキラリと光りました。けれどもわたしたちが近くにいとわかれると、トカゲはあわててにげだして、まるで妖精のようにまたべつのすきまにかくれてしまいました」(「イタリアののぞきめがね」より)ファージョンにとって夕方とはこのように、昼と夜との間にある「すきま」を思わせる時、月も日もある光

輝にみちた時、妖精が出てくる時、空想も現実も一つになれる時であったと思いません。記録の中で何人かの母親が、「子どもが一日のうちで一ばんうれしそうな」と言っているのは、昼と夜の間のこの時であります。家の中には父も母もきょうだいも揃い、昼でもあり夜でもある明るい時が出来ます。また子どもが、ねる前の一人の内的世界を持てる時でもあります。

\* \* \*

「寝にいくつてどうしてこんないやなんだらう。ベッドに寝てるのはとてもいい気持なのに」(「ヒナギク野のマーティンピン」より)この言葉はそのまま私たちの子ども言葉であります。九歳の女の子が夕食後、一人遊びを楽しんでいる時、「もう寝なさい」と声をかけられ「一日中昼ばかりだといいのに」と言いました。家中での心はずむ夕食と、それに続く一人遊びの世界がいつまでも続けばいいと思うのはこの

子だけではないでありますよ。

\* \* \*

「あたしたち寝にいかない」（「ヒナギク野のマーティン・ピン」より）この作品は、くりかえし出てくるこの言葉が、短いおはなしを次々に引き出すようになっていきます。寝に行きたがらない子どもたちは、それこそどこにでもいるのでありますが、その一つを記録から挙げれば次のようであります。（十一か月男の子）「九時頃から十二時頃までねむいのだけれど寝つけない様子、パパのふとんを山ごえしたり髪をひっぱったり。家中をまわり歩くのをみて、パパは「夜警さんごろうさま」……困ったあげくこたつに一しょにはいって絵本をみながら話をしていたら興奮がおさまって耳をすまして聞いているうちに目がとろんとしてくる」ここでもおおかあさんのおはなしが登場し、眠りの前の内的世界を持つのを助けています。

「月は裏がえしに黒い裏を見せてのほり、昼はしょんぼりしほんで、夜はすつかりめちやくちやになりました。……」（「ムギと王さま」より）これは月がほしいと泣いた王女さまのお話の中ですが、子どもたちの昼と夜も時々ちやちやにしてたのしむようです。昼間、雨戸をしめて「さあ夜よ、オオカミがくるわ」と毛布をかぶって遊ぶ四、五歳児たち。自分の部屋の雨戸を閉めて、電気スタンドの灯で宿題をやり「わたしたち、徹夜で勉強してるの」と言う八歳の女の子のことなどが浮んできます。

このように子どもの夜と昼との間は、輝やかしさに満ち、内的な世界をたのしみつつ眠りの時に向うのでありますが、その流れの途中に寝に行きたがらないということはいります。ねむいのに、なお昼の世界に固執します。ここに生ずる或るたゆたいは、昼と夜との転換の時ばかりでなく、他

の大小様々なくりかえしの転回点で起ることであります。私の頭にせんたくばさみをのせてその落ちる時、キャッキャッと笑った二歳の女の子のくりかえしは、笑いの波が静まり、次にせんたくばさみを拾い上げて私にわたすまでの間に小さな空白、時間とは言えない「時」がありました。またくりかえしつづ歩む人の生の転回の時にも新しく進もうとし、もう自分の中に新しい歩みが生れているにもかかわらず、前の時がいつまでもいいと願っている自分に気がつきません。くりかえすという言葉は、糸を幾度もたぐることからきた言葉で同じものが途中で切れずに、何度も行われることだそうであります。私たちの行為としてのくりかえしが、連続性の中にあり、転回点ではたゆたい、またそこを過ぎると勢こんで進むということは、まことに生きた人間の行為であると思います。